

4. 植民地史比較の中でのインドと中央アジア

(Workshop on Comparative Colonial History: Focus on India and Central Asia)

日時：2009年6月2日(火) 15時～19時

場所：東京大学駒場キャンパス14号館208号室

報告1：Brian Roger (Tom) Tomlinson (SOAS, University of London)

From the Colonial to the Global: India and the International System in the 20th Century

報告2：Alexander Morrison (University of Liverpool)

Kazakhs Behaving Badly? N. S. Lykoshin and the Aftermath of the Andijan Uprising

最初の報告者トムリンソンは、インド経済史を専門とするベテラン研究者である。1930～70年代のインドの対外政策を概観する本報告の中で指摘されたのは、インドが独立以前からイギリス連邦の一員としてある程度独自の外交政策を取っていたこと、1947年の独立後のインドの対外政策は1960年代前半を境に2つの時期に分けられ、前半は非同盟諸国のなかの大国として、東西対立の仲介者としての存在感を発揮し、後半はソ連に接近したこと、そしてその転機となったのは、中国とパキスタンとの領土問題の表面化と、アメリカの中国・パキスタン支持であったこと、などであった。そして最後に、イギリスとの長年の宗主国・植民地関係を経て、ようやく独立したという歴史的事実が、第二次世界大戦後のインドの対外関係において、象徴的なソフトパワーとして一定の力となったことが重要であると述べられた。その後の議論では、インドとソ連の接近とイデオロギーの相違の関係や、経済問題と対外政策との関係、ソ連崩壊後のロシアの対 CIS 諸国政策とインド独立後のイギリスの対旧植民地政策との比較、などが論点となった。

続いて報告を行ったモリソン(本報告書の3も参照)は、著書 *Russian Rule in Samarkand, 1868–1910: A Comparison with British India* を2008年に刊行したばかりの、気鋭の中央アジア史・比較史研究者である。この報告では、カザフスタン中央国立文書館に所蔵されている一群の史料を用いて、1898年のアンディジャン蜂起の数カ月後にシルダリア州アウリエータ郡で起きた騒動を紹介した。その騒動とは、同蜂起を主導したスーフィーが配った武器を使って、あるカザフ人が反乱を起こそうとしているとして、彼の娘婿が告発したことをめぐむものである。報告者は、この問題へのロシア側の対応を跡付けながら、植民地に関する情報収集能力が不十分な行政当局が噂に振り回される「情報パニック」の問題や、アンディジャン蜂起後ますます高まったイスラーム嫌いを、イギリスのインド支配やフランスの北アフリカ支配と比較して論じた。そして、東洋学の知識を使って告発の嘘を見抜いた一方で、ムスリムの「狂信性」を強調して軍政の維持を主張した軍人行政官リュコシン

を例に、ロシア側のスタンスには多様性があったものの、結局はイスラームへの偏見にとられ、土地・水などのより深刻な問題を見落とす傾向があったことを指摘した。報告後の議論では、アンディジャン蜂起に対する今日のウズベク史学の評価、同蜂起と義和団事変や南アフリカ戦争などの同時代性、ロシア官僚の権益維持と現地民社会の内紛という2つの視角からこの問題を分析する可能性などをめぐって、活発な意見交換が行われた。